まちなか勇者　いちのみや 劇団かたかご

心の声：
俺は勇者。昔殺された父の復習を果たすために冒険の旅にでる。
平和だ。魔物一匹もいない。

勇者「本当に魔王なんているのか」

横断歩道の向かいで魔王が待っている。
魔王はタンクトップの白シャツで表面に黒マジックで「魔王」と書いている。

勇者「いたー！？」

心の声：
いや、まてあれは魔王か。いや魔王じゃないよな。なんか魔王って書いているけど気のせいだよな。あんな、汗かいてないよな、魔王ってふつう。

魔王「魔王だ」

勇者「魔王だった…」

いや、ここは気にするな。信号待ちの間に逃げよう。
そうだ、こういうのは仲間を集めるのが先だよな、どっかいないかな剣士とか。

公園のベンチにホームレスのような剣士が座っている。
剣士は昼間から缶ビールを飲んでいる。

勇者「いたー！？」

心の声：
いや、まてよ、あれじゃないよな、あれはただのホームレスだよな。
剣士「剣士のケビンだ」

「剣士だった…」

心の声：しかも名前ケビンってなんだよ、無視しよう。
うわ、めっちゃ金せびってくるけど無視しよう。

だいたい街中に冒険の仲間がいること自体おかしいんだよな。魔法使いなんか、普通、森の中だよな。毒キノコとか生えてる森だよな普通

勇者歩いていると、ママチャリに乗った魔法少女の服をきたおじさんが横切る

心の声：
いたー、今までの流れからしてあれだよな。きのこカゴに乗せてるし。いや、ていうかただのおっさんじゃん。知らんふりしよう、目合わせたらろくなことない。

一瞬振り返る
おじさん、主人公を凝視

勇者「めっちゃ、こっち見てる〜！」

おじさん「魔法使いの…」

勇者「いや、違うだろぜったい、ただのコスプレ変態おじさんだろ」

おじさん「ケビンだ」

勇者「あんたもケビンなの！？」

心の声：
いや、もう外歩いているとろくなことない。
家帰ろう

リビングに入ると、魔王がソファに座って机に足をおいてテレビ見てる。

心の声：
魔王いるー！めっちゃくつろいでる。そしてポテチめっちゃ食ってる。
足どけろよ、汚いな

魔王「おかえり」

心の声：
挨拶してきたー！？

どうすればいい、ここはただいまというべきなのか、いや、ていうかここおれの家だよな。
なんでここにいるんだ。まあ、いいや、でも魔王なんだからとりあえず倒せばいいか。
(近くにある新聞紙をとってまるめて)おりゃ。
魔王「ぐわあああぁあああああああ」
勇者「死んだー！？」
魔王「この大魔王ケビンに一生の悔いなし」

勇者「おまえもケビンなの！？」

心の声：
なんか魔王倒せた。家で。冒険に出るまでもなかった。

家の奥から男の人がやってきた

「お、おまえは」

「え、あなたは？お父さん？、生きてたの？」
「父だ、毎日飲んでた黒酢のおかげで助かった」

ふたり駆け寄り、
「お父さん」
「ケビン」

心の声：
そうだ、俺もケビンだった

(完)